

敗に歸せし次第と理由とを明かにし、著者獨特の見解を發表し、次いで銅錢と金銀との關聯問題を取上げて複雑なる價值關係を明快に論述してゐる。

第五章「仁宗朝前後の通貨問題」に入りては、先づ陝西河東の錢法の變遷から考察をす、め、西夏の興起が如何に宋の通貨財政に影響を與へたか、軍費の嵩大による銅錢の缺乏と缺乏に苦しめる宋朝が之が對策として惡貨たる大銅錢、大小錢錢の鑄造を行ふに至るが、それは單なる彌縫策でしかありえなかつたことを指摘し、しかもかゝる惡貨通用の惡影響が戰後に却つて増嵩せし事實を「さもあるべきこと」と論じ、次いでその頃流通せる諸種の通貨の品位質量と慶曆以後の鑄錢狀況に論及し、最後に支那最初の紙幣たる交子の出現問題に移り、詳細なる考證説明がなされ、從來の交子問題を一舉に解決した觀がある。第六章には全體の要約的説明を行つた結語を以て本書は終つてゐるが、附録として南唐鑄錢年表、北宋時代銅錢鑄造額増減表等參考すべき附表七を附加してゐる。

さて第一章緒言に於て著者の歴史研究態度の一端が示され、歴史研究に於ても自然科学同様の假説が必要であつて「精確を欲するの餘り、記録上より一步も外に出ない」ことは不可能であるばかりか、「吾人は更に進んで大膽に推理の範圍を擴張し、假説の上に假説を立てる」ことも許されねばならぬことを主張されてゐる點、頗る示唆深いものがあると思ふ。

本書紹介のため播讀中、私は名譽の赤紙を受けとつた。即日歸

郷となつたけれども、このため充分精讀の上、紹介することの出来なかつたことを最後にお断りしておかねばならぬ。(皇野書店、昭和十八年十一月發行、定價五、八三)(荒木敏一)

禮の起原と其發達

加藤 常 賢 著

禮は支那文化の中核であるから、その究明は支那文化の本質把握に缺くべからざることである。從來我國學界に禮の研究は少ないが、少し前に出た西、小糸兩氏著「禮の意義と稱述」と本書とは、その双璧だと思ふ。兩書とも支那古代の禮を研究對象とする點は共通だが、題名の違ふやうに、意圖せられる所は異なり、本書は特に發展史的考察といふ點に力が注がれてゐる。つまり加藤博士の舊著「支那古代家族制度研究」と同じ立場といふことになるが、あれほど難しいものではなく、かういふ方面には素人の私も先づ理解できたと思へる程讀み易く書かれてゐる。

博士に從へば、禮は儒教の根幹にして、支那社會に於ける凡百の生活範規であつた。而して凡百の文化現象は社會生活の上に考へられるから、禮及び儒教の發達は次の如く社會の發達に應じて三段階に分けられる。

一、氏族時代……小邑時代——殷代及股周の交——原始儒教時代——禮時代

二、宗族的封建時代……封建國時代——春秋前後の邑併合時代——前期儒學時代——四科時代

三、純封建時代……封建國併合時代——戰國時代——儒學時代

——六經時代

かゝる發達段階を考定し、大體に於て、一、二を上編（禮の起原と其原理）に、三を下編（禮思想の發達）に述べてある。然らば禮の起原は何處に在るかと云ふと、それは *Wachana* の神聖觀念に求むべきである。即ち人は神聖なる對象に畏敬畏懼の念を抱き、それとの接觸に際して危險を回避する手段として儀禮を生ずる。それが禮の起原である。このことは消極的儀禮（吉凶二禮）にも積極的儀禮（飲食の禮）にも充分窺ひ得る。かゝる禮は道德法律宗教政治軍事が未分化の一體をなしてゐた社會の凡ゆるものを統制する制度、或は文化であつて、この狀態に於ては教とはこの禮を教へることに外ならぬ。それを教へる者は、族人を率ゐて祭政を一身にて行ふ長老である。後に別の意味を有する師と儒とは言語的にも同源で、原意は老の一義である。この禮時代には「禮は庶人に下らず」といふことはない。

ところが人智が發達すると前の神祕は凡俗となり、愚人の神聖は知者の凡俗となる。茲に宗教的儀禮から世俗的儀禮への轉移、神聖の世俗化、宗教の道德化が生ずる。世俗的儀禮の意味の抽象化が行はれ、宗教から道德が分離する。即ち本來儀禮の意なる義、禮の字が道德原則たる意味を持つやうになる。この轉移は知識の進歩に比例するから、君子社會は早く宗教的神祕觀から脱却するが、野人社會では依然宗教的態度を脱し得ぬといふ社會的不統一が認められる。がとにかくこの變遷は儀禮擔當者の分化を齎らした。即ち喪禮の専門家としての小人儒が民間に存在し、祝が

貴族間に存在せるに對して、道德の指導者として師郷先生等の君子儒があつた。前者は儀禮の實際家で儀禮（書名）等の坐作進退を記した文獻を傳へた功あり、後者は世俗儀禮を傳承し、後に禮に倫理的解釋を與へた功がある。かくして儒と師とは分離した。

以上は上編の概要であるが、下編は、左傳以下、孔子・老子・孟子・荀子等の禮說に就いて述べてあり、『禮の意義と構造』の第一篇「儒家の禮說」と大體同じ對象である。下編に説かれる禮は、封建社會組織と融合せる禮で、既に「禮は庶人に下らず」といふ考へがある封建貴族の禮である。この禮は、「政治の本としての禮」と「身の本としての禮」との二方面から論ぜられ、前者は禮、後者は儀と區別されることもある。孔子の考へは、左傳のそれと格別の差はないが、彼は古禮に倫理的解釋を與へた。老子は當時の文に過ぎた禮を道破した。孟子は禮を心に根據づけ、倫理の目を統一的に組織した。荀子は人心の欲情を禮の起原として、禮を倫理的制約と見た。彼に於て道德と法律、儀禮と法律の概念に分化が始まつた。最後に禮の規範觀念と王道思想とが合して春秋學となり、周禮の一王の下に於ける國家組織が示されたのである。

以上で兼雜な紹介を終るが、本書の特徴は上編、就中禮の起原論に在り、博士の論述は終始一貫整然としてゐる。たゞ禮の發達は社會生活の發達に相應ずるとされながら、なほ社會生活そのものの説明は不十分ではないかと思はれる。近頃翻譯されたグラネ『支那人の宗教』を讀んだ直後だから、さう感じるのかも知れない。また禮が神話傳説と如何に關係するのだらうかといふ疑問も

起つて来る。それはとにかく、本書は支那古代の禮に關する優れた概説的研究であることは疑ない。(昭和十八年四月、中文館書店發行、一九六頁、二四六十三錢)(小畑龍雄)

支那周邊史(下卷)

「支那地理歴史大系」第十二篇

アジア史、大東亞史と呼ばれてゐる今日、「支那周邊史」なる本書の題名は一見讀者に奇異の感を興へるが、これは本大系がその名稱の如く支那を中心とする所から來た「便宜上」のものであることは既に上卷に於て編者の斷られた所である。従つて特に「周邊史」としての體系があるのではなく、たゞ朝鮮、滿洲、蒙古、トルキスタン、西藏、印度支那及び南洋といふ支那周邊地方の各々の通史が個別的に平易に書き下されたもので、本書は上卷の後をうけ、蒙古史後編(近古近世)、トルキスタン史、西藏史、印度支那及び南洋の各地域史が各編 各時代毎にそれらの專家の手によつて叙述されてゐる。

先づ蒙古史近古(愛宕松男氏)は遼金支配時代に始まり、蒙古大汗國を経て元朝滅亡に至る蒙古族大發展の時代で、蒙古史としては比較的一般に知られた時代である。その爲か平凡な概説風の叙述は避けられ、部族社會史、制度史的な視點よりするや、獨特な書きぶりであるが、巧みに要點を把へた表現は僅少の紙幅の中にその歴史的發展の様相をよく組み込んでゐる。續く近世(鴉淵一氏)は明代蒙古各部族の消長から始まり、清朝の蒙古統治を経て

現代蒙古の動向に及び、焦點は終始支那との交渉に合せて進められ、政治政策的な叙述法は平面的常識的であるが、細かく小見出しを附してまとめられ、それだけ概説としては適切である。

トルキスタン地方は葱嶺を境界として東西兩地域に分れる。支那との交渉史より見れば勿論支那に近接せる東トルキスタンの歴史が歴史的に重要であるが、さりとて西トルキスタン史とても決して無視し得ない。第一章上代(内田吟風氏)は東トルキスタン即ち「支那周邊としての西域」に重點が置かれ、匈奴支配下の天山南北路諸國家の状態その文明、漢代の西域經營策から南北朝時代北方民族の角逐がトルキスタンに及ぼした影響にまで及び、多分に文化史的な面が採入れられ、且つ豊富な寫眞の挿入と難解な語句の附註とは一般讀者の理解を容易ならしめる。第二章中古(石濱純太郎氏)隋唐五代ではトルキスタンは北方突厥、回鶻、東方支那、南方吐蕃、西方大食の四大勢力の爭朝場として考へられ、加へてトルキスタン 内部諸國家に一應の概観が興へてあり、第三章近古(宮崎市定氏)宋代及び蒙古時代になると、東トルキスタンのみならず東西兩トルキスタンが包含され、その東方支那及び西亞歐洲の東西交通の中継地としての活躍が政治文化の兩方面にわたつて大きく概括され、對支交渉よりも寧ろ東西交渉史的意義が述べられてゐる。第四章近世(羽田明氏)に入ると記述は俄然詳細になる。明朝、帖木兒朝との交渉、回教の浸潤から、清朝のトルキスタン統治策を経て現代の新疆まで實に百頁、本書の四分の一が費され、特に回教勢力と支那勢力との衝突、露國の壓迫等詳細な